

ザッパ会長、佃会長、そして安藤大使、ペトロネ大使、ありがとうございます。ペトロネ大使とは過去に一緒にお仕事もさせていただいたことがあります。それから甘利議員をはじめ、この会場にいらっしゃる皆様にご挨拶申し上げます。この会合に私を招待して下さい、ありがとうございます。いくつかの考察についてお話しする前に、日本の大きな友人であった偉大なイタリア人について言及したいと思います。ウンベルト・アネッリ氏ですが、彼は長年情熱を持って日伊交流協会の会長を務め、両国の交流増大の支持者でありました。

日本とイタリアは距離としては、2万キロ以上も離れているわけですが、歴史、伝統、文明、アイデンティティーも全く異なる国です。しかしながら、両国の歴史を見てみますと、まるで並行しているかのように、非常に多くの類似点があります。イタリアは今年統一150周年目に当たりますが、ちょうどその統一直後の19世紀半ば頃、そして日本もちょうど同じ頃、経済的および社会的近代化を知ったわけです。20世紀前半は皆さんもご存じのように、両国は独裁国家でありながらも当時の世界の中で役割を果たせるスペースを探していましたが、エピローグとしては大規模な破壊を招いた戦争を体験しました。特に日本では世界初の核爆弾が落とされ、その被害は相当なものでした。戦後は両国とも素晴らしい経済奇跡が起こり、比較的短期の間に戦争による廃墟から脱し、強化された経済を築き上げると同時に確固とした民主主義も作り上げられていきました。

また、イタリアと日本の政治も非常に似ている部分があります。ほぼ半世紀の間、両国ともイタリアの場合はキリスト教民主党、日本は自民党と一つの政党の支配体制にありました。そして両国ともアメリカ合衆国と特権を持つ同盟国であり、イタリアは地中海において、日本は太平洋においてそれぞれ二極式構図を作り上げています。両国はまた、ソビエトとも国境が近いため、その動向にも大変敏感でありました。ベルリンの壁崩壊後も、非常に似通った政治的発展を遂げています。私自身はイタリアの中央左派の代表者でありましたがウリーヴォ党との連立があり、日本でも菅直人首相の民主党が政権を握るようになりました。菅氏とは過去に何度か意見交換をする機会があり、良く存じ上げています。

そして過去数年の経済金融危機においても、両国には類似点が見られます。日本はまだまだ経済停滞していてそこからなかなか脱することができず、イタリアも欧州連合の中ではなかなかこの危機から脱出できない国の一つで、成長率予想も最も低い国の一つです。両国とも高い公債を抱え、経済発展および成長の妨げとなっています。とはいえ、両国とも強い工業国であり、この日伊ビジネスグループの存在からもわかるように、危機から脱する力は十分に持っています。グローバル化においても日本とイタリアは主役といえます。G7、G8、G20のメンバーであり、OECDにも入っています。先進工業国であり、大変似た工業の構造を持っています。日本は多くの大企業があり、こちらにもその一つである企業から佃会長がいらっやっていますが、その反面、中小企業も多く存在し、その生産はGDPの65%を占めています。イタリアも同様で、GDPの80%を占めています。

社会的にもまた類似点があります。両国とも高齢化が顕著となってきています。他の国でもこれは問題になってきていますが、イタリアと日本は出生率も低く、さらに高齢化が進んでくるため、労

働市場の構造が変化してきます。したがって両国とも、移民が流れ込んでくることにより、その人口構造の変化に対応する状況となってきています。

以上、様々なデータを出してみました。両国を隔てる距離、文化の違いがありながらも、多くの共通点を持ち、それをベースに緊密な関係を築くことができている。これをさらに発展させていくには、投資および交流における具体的な補充点を見極める必要があります。日本はイタリアにとって重要な投資パートナーであり、伝統的にはファッションや食材関連の分野における取引が盛んでありましたが、それだけではありません。機械工業、鉄鋼業、航空宇宙学、ナノテクノロジー、先進テクノロジー、化学などの分野の交流も盛んです。また日本にとってもイタリアは自動車、電気製品、その他様々な製品購入の重要なパートナーです。MADE IN JAPAN と MADE IN ITALY はお互い補足し合うもので、更なる発展、特にエクセレンスの分野において発展が期待されます。今日のグローバル化の中では、競合性というのは製品の品質にかかってきています。イタリアと日本のような高いレベルの工業先進国では労働コストも高いため、新興国との競合では単なるコスト削減ではなく、継続的なテクノロジーの品質向上が必要です。製品の品質に関するテクノロジーを高めていくことこそ、グローバル化の中で競合できるといえるでしょう。中国やインドといった国を考えた場合、或いはメキシコ、南アフリカ、ナイジェリア、ベトナムなどの新興国はすべて市場に直面し、市場の主役となってきました。もちろんある意味、イタリアや日本よりこれらの国は生産条件がいいわけですが、やはり競合していくためにはテクノロジーの品質を向上させるしかありません。グローバル経済の中では常に前をいくものが勝つわけです。継続的に製品開発テクノロジーのイノベーションを行い、ウサギのように常に前へ前へ速く飛び跳ねていかなくてはなりません。

ここでイタリアと日本の持つ科学技術資産を、両国の企業が出し合えば、非常に素晴らしい力になると思います。これこそがこれからの両国の貿易および投資の交流を発展させていく上で鍵となる点だと思います。ここで強調したいのは、イタリアは中小企業で成り立っている国です。企業の98%が従業員数30人以下です。イタリアの国際化というのは伝統的には輸出に頼ってきました。輸出によりイタリアは成長してきたわけですが、グローバル化が進むこの世界では輸出だけでは十分ではありません。製品の購入者は、もはや製品だけではなくテクノロジー、そして資本まで買いたいのです。イタリアの国際化における問題点は、海外での直接投資を増加させることです。ですから貿易交流のみでなく、輸出強化、さらには輸出先にメーカーも進出させることです。イタリアにとってはこれが優先課題の一つでしょう。例えば日本での直接投資を増加させる、これはちょうどイタリアへ投資を誘致したいのと同じことですが、イタリアは残念ながら先進工業国であるにもかかわらず、外国の直接投資率が大変低い国です。ですから単に両国の交流改善が課題なのではなく、相互投資の増加、これが最も優先されなければならないでしょう。

もう一つの優先課題は、文化協力です。既にイタリア貿易振興会のマンベルティ総局長もおっしゃっていましたが、日本人は何百万人もが既にイタリアを訪れ、イタリアのことを知っています。しかし日本に行ったことがあり、日本のことを知っているイタリア人は少数です。これも一つの課題ではないでしょうか。日本のイタリア人の存在をより増やすことにより、観光、文化、そういった関係から両国の交流をより活発化させることができるのではないかと思います。

日本語でイタリアと書くと美しい歌の国と書くそうです。イタリアに対するイメージというのが既にあるわけです。我々も日本文化について少しずつでも知識を高めていくことができるでしょう。このように文化交流を活発化させたり、大学機関同士の交流なども、両国関係強化の一つのドライバーとなるでしょう。

最後に、両国は G7、G8、G20、OECD のメンバーであり、グローバル化による挑戦に対する適したガバナンスを行うという政治的責任も負うものです。この 2 年間の経済危機では、経済メカニズムのみに頼ったグローバル化は、無秩序なグローバル化を引き起こすだけだと証明されました。グローバル化の政治ガバナンスの問題があったわけです。ですから先進国は政治的責任を負うものでなければなりません。この観点から、私自身も欧州連合と日本の関係がより深くなることを願います。まずは現在行われている経済的合意を見るのが先決です。イタリアと日本は地域間統合政策、各種機関の關係に推進力を与える責任があるのではないかと思います。そしてもちろん、私の後に同僚の甘利議員がお話しますが、私達議員同士でも両国関係発展に推進力を与えることが重要だと思います。二国間の政治關係は、政府によるものだけではありません。過去数年で議員同士の交流も大変活発になってきました。ですから我々もイタリアと日本の経済協力關係において何らかの貢献ができるのではないかと考えております。

以上です。ご静聴ありがとうございました。